

(1 節)「イスラエルの全会衆は、主の命によりシンの荒野を旅立ち、旅を続けてレフィディムに宿営した。しかし、そこには民の飲み水がなかった。」

イスラエルの人々はシンの荒野を出て、レフィディムに着きました。そして、そこで天幕生活をすることになりました。ところが「そこには民の飲み水がなかった」のです。そこで

(2 節)「民はモーセと争い『われわれに飲む水を与えよ』といった。モーセは彼らに『あなたがたはなぜ私と争うのか。なぜ主を試みるのか』と言った。」のでした。

ここでも、飲み水のために、イスラエルの人々はモーセに向かってつぶやくのです。更に

(3 節) 水に乾いていた、民はモーセに不満をぶつけます。「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのか。私や子供たちや家畜を、渇きで死なせるためか。」それは、まさに、モーセが民を荒野で殺すために、荒野へと連れ上ったかのようでした。

—— つぶやきの民 ——

それにしても、なぜ彼らはつぶやくのでしょうか？主に祈る事をしないのでしょうか。実は、ここで「・・飲む水を与えよ」と、言っているのは、決して水が与えられることを期待して言ったのではありません。怒り、不信の思いを込めて、次の様に言ったのです。「『主は私たちの中におられるのか、おられないのか』と言って、主を試みた・・」のです。その意味は、「もし、主がここにいるなら水を与えるはずである。だから水を与えてみよ」と言って主をためしているのです。これは、非常に不信仰なことばです。

ちょうど、十字架に掛けられた一人の強盗が「お前がキリストなら俺たちを救ってみろ」と言ったことば、又、十字架の周りの群衆が「もしキリストなら、自分を救ってみろ」と言ったことばを思い出します。同じような意味ですね。「主がここにいるなら、水を出してみろ！」さて、そんな彼らがつぶやく2つの理由です。

・その理由、1。民は、昔の生活と比較して、昔は良かったと思っているのです。でも、本当にそうでしょうか？よく考えてみると昔は、エジプトにいた時は、何しろ奴隷生活ですから、それ程、楽しくはなかったと思います。むしろ辛かったと思います。人はいつでも何でも、昔は良かったというのです。

・その理由、2。今の生活に対する不満です。この広い世界の中で、多くの人は自分だけが苦しいと思っています。私たちも同じようなことでよく失敗をすることがありますね。例えば、信仰を得て、教会生活を忠実に、今励んでいるのに、礼拝も忠実に守っているのに、奉仕しているのに、献金もしているのに、なんで、こんなに辛い生活なんだろう。神様は何を

考えているのだろうか？ 信じてからいやなことばかり起こる。こんなはずではなかった。話が違う。前の生活がなつかしい、教会を離れて行った人のことが何か気になる。

今、イスラエルの民は、今まであれ程、自分たちに尽くしてくれたモーセに対して、「あなたは私たちを殺す気か」とまで言っています。それにしても、彼らはずっと、恵みは自分の良い信仰のせい、いやな試練はモーセ（特に指導者）のせいにするのでした。

——— 叫びの祈りをしたモーセ ———

(4 節)「そこで、モーセは主に叫んで言った。『私はこの民をどうすればよいのでしょうか。今にも、彼らは私を石で殺そうとしています』まさに、これは懸命な叫びの祈りですね。

一瞬うろたえていたモーセでしたが、彼はすぐに神様に立ち返りました。そして主に向かって叫び、祈りました。ここがモーセの偉い所です。私たちも、この様でありたいですね。気がついたら、すぐ祈るのです。すぐに神様からの、おことばがモーセに与えられました。

——— 神様からの答えがあった ———

(5、6 節)「主はモーセに言われた。『イスラエルの長老たちを何人か連れて、あなたがナイル川を打ったあの杖を手に取り、そして行け。さあ、わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。岩から水が出て、民はそれを飲む。』モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりに行った。」

さて、モーセは神様の命令のままに、民の中の長老たちを連れて、**ホレブ**の岩に行きました。そして神様の杖を持って、その岩を打ちました。すると、そこから水がほとぼしり出て来ました。イスラエルの人々は飽きるまでその水を飲みました。飲むことが出来たのです。

——— そこは**ホレブ**だった ———

さて今、神様がモーセにイスラエルの長老と「行け」と命じられた場所、なんとそこは**ホレブ**でした。そこは、モーセが初めて主と出会った所です。皆さんは気づいておられますか。彼が献身へと導かれた所です。ここで、モーセは初心に帰りました。彼の信仰は目覚めました。そして、言われた通り、杖（信仰）で、岩を打つことが出来ました。

私は、あのハガルを思い出しました。(創世記 21:14～19 節、読む) 砂漠で、革袋の水が尽き、死を覚悟して母と子が泣いた時、(19 節)「神がハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を見つけた。」と書かれています。彼女は目が開かれて、水を得たのでした。

それにしても神様は、こんな不信仰な民に対しても、やはり愛の神様ですね。怒ることなく、溢れるばかりのいのちの水を豊かに与える神様でした。この岩からの恵みの水を飲んだ者は、みな生き返りました。

——— 肉をうるおす水、霊をうるおす水 ———

さて、この世には、肉をうるおす水と、霊をうるおす水があります。

イエスは次の様に言われました。(ヨハネ 4:13、14 節)「この水を飲む人はみな、また

渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」

このいのちの水（聖霊）は、ホレブの岩から、ほとぼしり出た水と同じように、求める者には誰にも豊かに与えられます。

パウロも次の様に言いました。（第一コリント 10：4 節）「・・・その岩とはキリストです。」モーセは、神様から指摘された岩の前に立ちました、そしてその岩を打ちました。するとその岩から水がほとぼしり出ました。キリストの水が民全体に命を与え、彼らを癒し、そして満たしたのでした。

（黙示録 22:17 節）「・・・渴く者は来なさい。いのちの水（聖霊）が欲しい者は、ただで受けなさい。」 今朝、私たちもこのいのちの水をいただき、癒されたいですね。

さてこの時代、モーセが神様から与えられた一本の杖（信仰）によって水の問題は解決しました。私たちも信仰生活の中で、自らを見失うような時もあるでしょう。そんな時、私のそしてあなたの、ホレブに立ちましょう。そして神様からいただいた杖（信仰）を持って岩（キリスト）に触れさせていただきましょう。そこから、また新しい一歩が始まります。

———このわたしがあなたを遣わすのだ ———

最後に、ハンセン病の共生園長島曙教会、大島得雄牧師のあかしです。

先生は困難な働きが続く中である時、献身の思いが挫折してしまいました。

そんな時に、先生は士師記のみことばを示されました。士師記 6:36～40 節です。そこにはミディアン人と闘うようにと神に召された時のギデオンの祈りが書かれていました。その時、ギデオンはこの召しが本当に御旨であるかどうかを次の様に確かめました。

（36、37 節）「もしあなたが言われたとおり、私の手によってイスラエルを救おうとされるなら、ご覧ください。わたしは刈り取った一匹分の羊の毛を打ち場に置きます。もしその羊の毛だけに露が降りていて、土全体が乾いていたら、あなたが言われたとおり、私の手によって、あなたがイスラエルをお救いになると私に分かります。」翌朝、彼がその羊の毛を押つけて絞ると、何と鉢一杯になるほど水が湧き出たのでした。彼は続けてもう一回祈ります。「・・・私にもう一度だけ言わせてください。・・・今度はこの羊だけが乾いていて、土全体には露が降りるようにしてください。」神様はその夜、そのようにされたのでした。

大島先生は、このみことばを原っぱの真ん中で思い出しました。ちょうど彼のまわりにはしおからトンボが飛んでいました。彼は祈りました。「私の献身が御旨ならばトンボがこの指に止まる様にして下さい。」そして、その祈りを 7～8 回繰り返した時に、何とトンボは先生の指の上に止まりました。その場所から、先生は再び曙教会へと導かれて行ったのでした。聖書のことば。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしがあなたを遣わすのだ。」（出エジプト 3:12 節）